The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Olivier Lumbroso, Dans l’atelier d’Émile Zola, Paris, Hermann, coll. «Dans l’atelier de…», 2024, 212p.
Author(s)	安達, 孝信
Citation	Gallia. 2025, 64, p. 201-203
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102161
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評：Olivier Lumbroso, *Dans l'atelier d'Émile Zola*, Paris, Hermann, coll. « Dans l'atelier de... », 2024, 212 p.

安達　孝信

パリ第三大学教授オリヴィエ・ロンブローゾ氏による *Dans l'atelier d'Émile Zola*（『エミール・ゾラのアトリエで』）は、Hermann 社が 2022 年から刊行を開始した叢書「……のアトリエで：草稿研究の試み」の第四巻にあたる。本書はゾラの生涯と作品を紹介する伝記的・入門的側面と、草稿研究史とその実践に関する専門的な要素を調和的に共存させている。第一章「創作の場」ではゾラの生涯を振り返りながら、時期ごとに異なる創作の場（屋根裏部屋、パリの書斎、メダンの館、亡命先）を分析する。第二章では、ゾラ草稿の種類とその散逸、収集状況を説明した上で、現代のデータベース化に至るまでの一世紀間の草稿研究史を紹介する。第三章では、草稿分析に基づきゾラ作品全体の美学とイデオロギーを明らかにする。第四章では狭義の草稿の枠を越え、作家の書簡や同時代人の著作・証言を参照しつつ 19 世紀後半の文学場全体におけるゾラの創造美学を問う。

第一章「創作の場」は、一般の読者にとってはゾラの伝記として読むことができ、より専門的な読者はそこにゾラの創作と人生の相互作用を見出すような、専門性と入門性を両立した章となっている。父親を幼少期に亡くし、18 歳になる年にパリに出てきた青年は、二度のバカロレア失敗を経て、カルチエ・ラタンでの窮乏生活を余儀なくされる。彼が初期小説『クロードの告白』（1865）や『死せる女の願い』（1866）を書いたのは、「つつましいカシの板」（p. 14）の上であり、執筆専用の空間など夢のまた夢であった。ゾラの名を一躍世に知らしめた三作目『テレーズ・ラカン』（1867）の出版は、彼のパリ右岸への移住と同じ年であり、その住環境、ひいては執筆環境は徐々に恵まれたものとなっていく。念願の書斎を手に入れたのはコンダミーヌ街へと引っ越した 1869 年だが（p. 16）、それはまさにゾラがファムファタル物の初期小説を終え、次なる連作へと漕ぎ出した時期と合致している。セザンヌによる二枚の絵（*Une lecture de Paul Alexis chez Zola*, *Paul Alexis lisant à Émile Zola*）が伝えるその部屋こそが、緻密に練られた執筆プランと膨大な資料の整理と保管を要請する『ルーゴン＝マッカール叢書』の執筆を可能としたのだった（p. 16-17）。

このようなパリ右岸のブルジョワ的なアパルトマン内の書斎とは別の執筆空間がゾラにはある。それがパリ西郊、セーヌ川沿いの村メダンに築き上げた館である。『居酒屋』（1877）の大成功によって得た資金で 1878 年に購入されたこの館は、二つの塔（ナナ、ジェルミナール）が間を開けて増築されたことで、左右非対称な姿となった（p. 35）。ゾラは現実を小説に導入することと同程度に、フィクショ

ンを現実に反映させようとする作家であるが、このメダンの館には（塔の名前からもわかるように）『叢書』の負の側面とも言える「例外的な人々（司祭、娼婦、画家、殺人者）」に関わる夢想、幻想が強く刻印されている（p. 39）。整理と秩序のパリの書斎と、カオスに満ちた想像力のメダンの書斎。ゾラが季節ごとに行き来した対照的な二つの空間の攪拌こそが、『叢書』の底知れぬ活力を生み出している。

第二章「古文書＝世界の歴史」では、より専門的にゾラの草稿研究史が紹介される。まず草稿の種類と散逸状況が紹介されたうえで、草稿研究発展の観点からゾラ再評価の年代記を振り返っていく。粗野な民衆と労働者ばかりが登場する卑近でときに卑猥な小説群、あるいは実証主義的理論を小説に応用した擬似科学的作品群という紋切り型が打ち倒され、壮大にして各部が緻密に組み合わさった構造物としての『叢書』の姿が立ち現れてきたのは、その創作手法が草稿研究によって明らかになったことと不可分であった。一般読者の好評にもかかわらず大学人には無視されてきたゾラの学術的研究が真に始まったのは、雑誌 *Cahier naturalistes* の刊行が始まり、アンリ・ミットランがゾラの息子ジャック・エミール＝ゾラより草稿へのアクセスを許された 1955 年以降のことである（p. 89-91）。その成果はプレイヤッド版『ルーゴン＝マッカール叢書』（1960-1967）、および Cercle du Libre Précieux 版『全集』（1966-1970）に結実する（p. 91-92）。1968 年には CNRS（フランス国立科学研究センター）内にゾラ研究グループが発足し、1975 年にはフランス・カナダ共同でのゾラ書簡集の刊行が始まることで、草稿研究は次の段階に進んだ（p. 93）。その後、新聞小説として連載された版への加筆修正といった、エクリチュールの仕上げ段階へと関心を拡大させながら、ゾラ草稿研究はますます発展を続けている。

第三章「連作の腹のなか」では、実際にゾラの草稿に分け入りながら、そこから見える創作美学と作品世界を紹介していく。ゾラの草稿が、作家のつぶやきが聞こえるような「下書き」、二段階の詳細な「プラン」、遺伝／生理学／環境的に説明される「人物」、資料を調査して得られた「情報」、そして物語が起こる界隈や建物の構造をデッサンした「地図と図面」とに分類されることはよく知られている（p. 118-119）。この「プログラム化」されたエクリチュール（p. 95）によって作家は、バルザック『人間喜劇』の「巨大だが未完成な工事現場」や「バベルの塔」との、あるいは「質量に押しつぶされた」ゴンクール兄弟の小説群との差別化を試みたのだ（p. 124-126）。自然主義の代名詞のように思われる現場での「調査」であるが、ゾラはどっぷりと環境に浸かり参与観察するのではなく、距離を保ち冷静にメモを取っていたことが分かる。とはいえ『ジェルミナール』（1885）執筆のために炭鉱に降りた時から、この作業が作家にある作用をもたらすようになる。それまで『居酒屋』などで粗野で愚鈍であるとの先入見を持って描いてきた民衆を、ありのままに表現するようになったのである。それがドレフュス擁護によって共和国を代表する知識人となる人権派ゾラへの、「正義の叫びへの第一歩」だった（p. 136）。そのようにして集められた資料から小説が形成されていく様子

(p. 144)、さらには『叢書』後の「第三のゾラ」における執筆の問題へと議論は展開していく（p. 156)。

第四章「アトリエの学校で」では、執筆のアトリエと呼べるものが「私的な実験室」に限定されるものではなく、その多孔質の壁は世界へと開かれていることを示していく。作家仲間や自然主義の弟子たちとの書簡から創作の美学が垣間見えるだけでなく、ウィリアム・ビュスナックら劇作家との書簡からはゾラがどのように自作のアダプテーションに介入していったのかが明らかになる。1880 年代に『叢書』が中盤にさしかかるなかで作家が見出した螺旋状に発展する連作（サイクル）という図式は、文学的不能を防ぐとともに熟練に伴う自己剽窃的生産を避けるためでもあった（p. 183-185)。数ヶ月かけて構想した小説の構造が理解されないことなどを嘆く書簡などからは、小説連載中のゾラが他者の批評に敏感に反応し、必要があれば単行本への修正に生かしていることが見えてくる（p. 190-191)。自分自身の批評家として下書きを検討するゾラの姿に迫る本章の後半は、ロンブローゾ氏の研究にもっとも近く、専門的な議論が展開されている。とりわけ、新たな小説に取り掛かる時の高揚感や筆の震えから、書き始めた時の満足感を経て、出版直前に味わうことになる疲弊感と嫌気という段階についての指摘は(p. 194-195)、作家自身による回顧的な作品評価を全面的に信用することの危険を教えてくれるだろう。

このように本書は、ゾラ研究者のみならず、20 世紀後半以降の生成研究の発展史をゾラ研究の観点から振り返りたいという文学研究者、さらには広く創作と実人生の関わりに興味を持つ一般読者にも広く読まれるべき著作であるといえる。

（名城大学助教）